

脳血管疾患による失語症の予後に対する年齢、重症度の関係

山田 祐也¹⁾ 腰塚 洋介¹⁾ 風晴 俊之¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]我々は、脳血管疾患患者の ADL の予後に対して年齢と重症度が関係することを報告した。しかし、失語症の予後に影響する因子に関する報告は少ない。そこで今回、脳血管疾患による失語症患者のコミュニケーションの獲得に年齢と重症度が影響するか調査した。

[対象]平成 26 年 6 月～平成 31 年 3 月の間、当院回復期リハビリ病棟に入棟した脳血管疾患による失語症者 599 名のうち、WAB 失語症検査が実施できた 308 名を対象とした。なお、状態悪化した患者や死亡患者は除外した。

[方法]対象者を年齢ごとに I 群(50 歳代未満)、II 群(50 歳代)、III 群(60 歳代)、IV 群(70 歳代)、V 群(80 歳代以上)に分類した。また、重症度ごとに失語指数(AQ)で軽度群(AQ80 以上)、中等度群(AQ40～79)、重度群(AQ40 未満)に分類した。それぞれで退棟時における FIM の理解、表出項目が 6 点以上に達した患者の割合を調査した。

[結果]年齢ごとの比較では、理解は I 群と V 群の間にのみ有意差を認めた($p < 0.05$)。表出は全ての群間で明らかな差はなかった。重症度ごとの調査で退棟時 6 点を上回ったのは、理解が軽度群 75%、中等度群 32%、重度群 11%で、表出は軽度群 69%、中等度群 19%、重度群 4%であり、理解・表出ともに有意差を認めた($p < 0.05$)。

[考察]今回は、言語能力ではなく、非言語能力も含めたコミュニケーション能力について検討をした。年齢に関しては、理解面で 50 歳未満と 80 歳以上の間でのみ差が認められ、加齢による認知機能の低下が影響している可能性が考えられるが、ほとんど予後に影響しないことが示唆された。重症度に関しては、重症であるほどコミュニケーションに介助を要することが示され、予後に影響していることが示唆された。失語症の予後予測は、年齢に囚われず、重症度や治療経過に応じて慎重に検討されるべきである。